

# 特集2



大学の広報誌が「いじめ」問題を扱うことには、いささかの奇異感を覚える読者も少なくないかもしれない。問題が深刻であることは周知のとおりであるが、実際問題、その防止と解決に大学が直接的に貢献することには限界があるかもしれない。

しかし、学生や教職員がそれぞれの立場でこの問題に重大な関心を持つという事は、その解決のみならず、大学における教育、とりわけ教養的教育の理念や目標等を考えていく上で無益なことではないと思われる。そこで、二回にわたって「いじめ」問題を特集することにした。

## 学校社会における「いじめ」

学校教育学部附属教育実践研究指導センター

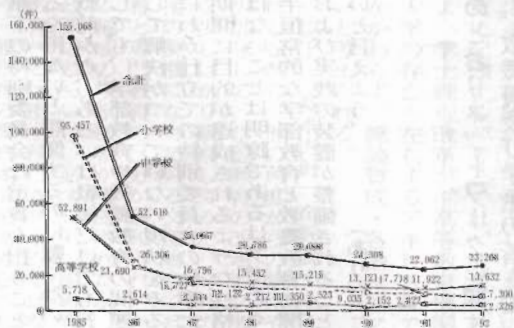
高橋 超

### 1. 「いじめ」の実態

一九八六年二月、東京の中学生が「葬式ごっこ」と称されたいじめによって自殺してから、昨年十一月の愛知県西尾市の中学生の自殺が起こるまで、その発生件数が減少傾向にあるということから、いじめは、増加の一途をたどる不登校ほどには大きな社会的関心が向けられてこなかった。

事実、文部省がいじめ調査を開始した一九八五年以降、数の正確さには疑問が残るものの、発生件数は大きく減少してきているのである(図1)。こうした減少が、「自然鎮火」でないことは言うまでもない。学校をはじめ地域社会や家庭などにおける防止のための努力によるものである。

しかし、発生件数の減少とは裏腹に、近年、いじめが関係していると思われる児童生徒の自殺が頻発し、問題の深刻さが一挙に大きな社会問題になっており、いじめの今日的実態が明るみにだされつつある。児童生徒の豊かな人間性が育まれるべき学校社会において、人間的尊厳が踏みにじられたり、命が脅かされ



【出典】：「94-95教育アータラジ」2000年、時事通信社。  
【出所】：文部省調査による。

図1 いじめの発生件数

れたり、自殺にまで至るようないじめが、親や教師などの大人の目の届かないところで頻発していることは、現代のいじめ問題がいかに深刻であるかを示している。

現代のいじめは、単に学校教育だけの問題ではなく、社会のあり方にも深く根ざした問

題であり、親や教師、さらには子どもたちのみでは解決が著しく難しい問題でもある。極論かもしれないが、国民全てがそれぞれの立場で解決のための努力をしなければならぬであろう。

一九八五年以降、いじめの発件数の減少傾向は、教師のみならず多くの大人に、ある種の楽観主義をもたらしたとも言える。こうした楽観主義が、十余年の間に生じた学校社会の変化、とりわけ子どもたちの学校内での多様な対人行動の価値規範の変化を気づきにくくしていた、ということである。

「葬式ごっこ」で自殺した中学生の残した遺書が、読む者に息を詰まらせるほどの仲間への痛烈な抗議で綴られているのに対して、愛知県西尾市の中学生の場合には、両親へのお詫びと仲間をかばおうとするものであったことが、この間の子ども社会の変化を端的に物語っているともいえる。

## 二. 「表」文化のうねり

昨今のいじめの大きな特徴として、①非可視性の強化、②陰湿化、③動機の曖昧さなどが指摘されている。いじめた生徒にその理由を尋ねても、「面白かった」、「むかつく」などといったものが少なくなく、教師や大人が啞然とさせられることもある。いじめの背後に、いわゆる「思春期葛藤」が内在していることを考えれば、生徒自身がいじめの理由を特定できないこともあるかもしれないが、何よりも深刻なことは、学級や学校の中の「裏」文化としてのいじめが「表」文化に変化してきている、ということである。

教師や親などの大人の目が届かないところでいじめが起きていることは、昔も今もそんなに変わりはない。決定的な違いは、クラスの中の多くの仲間の前で「平然」と行われているということである。その結果として、見て

見ぬ振りをする消極的傍観者、はやしたてる積極的傍観者といった具合に、クラスの生徒全員が何らかの形でいじめに関与する状況になってきているのである。クラスの生徒のほとんどが直接・間接にいじめに加担しているというケースも少なくない。つまり、いじめが学校の中で「表」文化の一行動として定着してきているということである。

いじめが子どもたちの中で「表」文化として定着してきている原因は多種多様であり、それを明確に特定することは難しい。しかし、そのことがいじめに対する児童生徒の潜在的親和性を強めていることは間違いないところである。愛知県西尾市の中学生が、自殺にまで至るような身体的・精神的苦痛を長期間にわたって受けていたにもかかわらず、自分を責めることはあつてもいじめた生徒に対する恨みや抗議の気持ちが見られない遺書を残しているところにも、いじめが子ども社会の中で「表」文化に定着していることを窺わせている。

原因を特定することは難しいが、いじめが子ども社会の中で「表」文化として定着してきているところに、現代のいじめの根の深さがある。同時に、こうした文化の中で生活を送ってきた生徒（いじめ経験世代）が、高校や大学に進学し、社会に出ていることも、考えてみれば深刻な問題である。いつの日か、大人社会においてもいじめを「表」文化の行動とみなすような時代がこないとも限らない。いじめ防止に向けて、文部省を始めとした行政や学校レベルでさまざまな取り組みが開始されているところである。その成果を期待したいものであるが、大学に身を置く者が「いじめは、学校の問題であり、大学は関係ない」という態度を持つことは、結果として防止に向けて開始された諸努力に水をさすことになりかねないことを、我々は十分に認識する必要がある。

# いじめと家族

学校教育学部学校教育講座

石井眞治

## 一. いじめに対する親の態度

「見かねた父が報復一方引き強要や暴力……中二息子がいじめ被害」、「仕事に追われいつも家にいなかった」夜遊び……いじめと気付きまで叱り続けた」（中日新聞夕刊、一九九五・三・五）。

これは、本年三月十五日にF県でいじめ問題が表面化したことに関連して、中二の息子がいじめられたことに腹をたて、いじめた同級生の男子二名を自宅に呼びつけて暴力を振るい怪我をさせたとして、監禁と傷害の疑いで、いじめられた生徒の父親の会社員が逮捕された事件を報じた新聞の見出しである。

わが国でいじめが重大な社会問題となつて十余年の歳月が経過している。この間、各方面でさまざまな防止・解決のための取り組みがなされたが、その関心は必ずしも持続的なものとは言いがたく、また、責任転嫁の議論のみで、責任を自らのものとし、根本的解決のための努力が不十分であったように思われる。昨年十一月に愛知県で生じたいじめによる自殺事件において象徴されるように、いじめのほとんどが学校内で生じているために、原因が全て学校や教師の側にあるという論が圧倒的に強いのである。

しかし、現代のいじめは、学校や教師の指導が原因で突発的に起こるようなものではない。家庭の側にも少なからず問題の一端が潜んでいる。このことを冷静に直視しなければ、いじめの根本的解決は難しい。もちろん、こ

のことは、いじめられる子どもやその家庭の問題があるということを中心しようとするものではない。いじめが学校内でのみ生じているから、家庭には責任がない、あるいは家庭は無関係である、という現在の風潮に対して、問題提起をしているのである。

冒頭に示した事例でも明らかのように、自分の子どもがいじめを受けていることを知ると、親は自分がいじめを受けた以上に感情的になり、叱咤激励したり、怒りを本人にぶつたりすることが多い。そのことがかえって、本人を孤立させたり、無力感を強化させることが多いのである。

## 二. 人間—環境システム

### としてのいじめ

もともと、我々人間は、日々の生活の中で種々の人間—環境システムを構築し、相互交流をしながら多様な社会的行動を行っているが、いじめ行動もこの例外ではない。これを、児童生徒—学校—家庭環境システムとして示したものが図1である。

子どもが学校でいじめを受けた時、子どもはその経験を家庭に持って帰る。そして、その経験は子どもだけでなく、家族システムの構成員にも何らかの影響を及ぼすことになる。冒頭の父親がこのケースにあたる。一方、家族構成員の行動がもたらした生理・心理的变化を学校生活に持ち込んでいく。言うまでもなく、人間が「生」を営んでい